

## Ⅲ キリスト教思想史の諸問題

### <前回> ニュートンとニュートン主義

1. マートン・テーゼ：キリスト教（とくにプロテスタント・ピューリタニズム）は近代科学の形成に積極的かつ実質的な寄与を行った。王立協会の初期のメンバーの多くはピューリタンの信仰の持ち主であった。
2. イデオロギーとしての科学、論敵を合理的に論駁するレトリックとしての科学
3. ニュートン研究の進展 → ニュートンの知的世界の全貌  
自然科学／自然哲学／自然神学／歴史神学／聖書解釈
4. 『プリンキピア』の神学
  - ①パントクラトールあるいは主という言葉遣い、そして神の統治や支配の強調
  - ②無神論論駁のための神の存在論証      ③自然哲学とその神学的根拠
5. 二つの自然哲学：機械論的と錬金術的  
機械論的自然哲学：物体、もの。受動的自然（外力なしに運動状態は変化しない）  
錬金術的自然哲学：生命、物質。能動的自然
6. ニュートンの歴史研究とキリスト教史・聖書解釈
7. 主なる神の支配とその秩序（自然と歴史の全体）
8. イデオロギーとしての自然神学・自然科学
  - ・ボイル講演：講演者には、ニュートンの弟子たち（ベントリー、デラム、クラークら）が多く選ばれた。
  - ・ニュートン主義の自然神学・デザイン神学
    - 1) 世界における見事な秩序・法則
    - 2) 偶然ではない
    - 3) デザイナーとしての神の存在
9. 共和主義と無神論（唯物論）との連合体に対する、王制と国教会連合という図式。

## 第4講：近代世界とキリスト教

### 2 啓蒙的近代とキリスト教

#### (1) 聖俗革命

1. 西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解は、この変動に規定されている。  
村上陽一郎は、これを聖俗革命と名付けた。  
第一段階：知識を共有する人間の側の世俗化  
知識の担い手、神の恩恵に照らされた特定の人間→すべての人間  
第二段階：知識を位置付ける文脈（この中に科学と哲学の分化が含まれる）  
「神—世界—人間」→「世界—人間」
2. ニュートンの場合に見たように、17世紀における科学的知は、「神—世界—人間」の文脈において展開し、この文脈において、ニュートン科学は社会に浸透していった。こ

うして成立した「近代科学」は、次第にその元来の文脈から離れ、一つの自律的な活動として自立して行く。ここに啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）が誕生し、その後の近代的知のモデルとして機能することになる。「宗教と科学」の対立図式は、この線上に発生する。

### 3. 代表例としてのラプラス

「われわれは、宇宙の現在の状態はそれに先立つ状態の結果であり、それ以後の状態の原因であると考えなければならない。ある知性が、与えられた時点において、自然を動かしているすべての力と自然を構成しているすべての存在物の各々の状況を知っていると、さらにこれらの与えられた情報を分析する能力をもっているとしたならば、この知性は、同一の方程式のもとに宇宙のなかの最も大きな物体の運動も、また最も軽い原子の運動をも包摂せしめるであろう。この知性にとって不確かなものは何一つないであろうし、その目には未来も過去と同様に現存することであろう。人間の精神は、天文学に与えることができた完全さのうちに、この知性のささやかな素描を提示している。人間の精神が力学と幾何学とにおいて発見したものは、万有引力の発見と結合することによって、同じ解析的表現のもとで世界体系の過去と未来の状態を理解できるようにした。」（ラプラス、『確率の哲学的試論』岩波文庫、10頁）

### 4. 注意点

科学の分野における相違あるいは時差

物理学・天文学は実証主義的科学へすみやかに移行し、生物学は最後まで残り（19世紀前半）、心理学（20世紀）が科学となるには、さらに時間が必要であった。

次の講義で論じる進化論とキリスト教との関わりを理解するには、こうした近代的知の生成と変動を念頭におく必要がある。

## （2）啓蒙主義の帰結

### 5. 宗教の私事化

宗教改革以降の教派的多元性の状況下での教派間対立は、17世紀から18世紀の至る過程で、「政教分離」システムを生み出した。これは、信教の自由（宗教的寛容）を可能にし、近代市民社会の秩序を安定化させるのに重要な役割を演じるようになる。もちろん、「政教分離」の実態は、国によって大きく異なるが。

しかし、これは公共の領域を私的な事柄（宗教、道徳、経済）の対立から切り離すことによって、宗教を私的なものとして位置付けることを帰結した（私事化）。政治や公教育からの宗教の撤退であり、近代科学の宗教からの自立は、この宗教の私事化に対応した動向であったと言える。

### 6. 歴史主義と自然主義

以上の近代的知は、知識あるいは思考・思惟のあり方に大きな変化を生じた。それは、自然法的な超歴史的思惟、あるいは伝統的キリスト教の超自然主義からの離脱である。

・思惟の歴史化（思惟の歴史性の自覚）

自然法的な超歴史的思惟 → 歴史主義（人間経験の事象の一切は、歴史の作用連関の中で生成したものであり、その中で理解し説明される）

- ・超自然主義批判としての自然主義

超自然主義 → 自然主義（宗教を含めた人間経験の事象の一切を、自然の領域内の関係性において理解し説明する）

#### 7. 近代聖書学（前期講義・第7講を参照）

近代聖書学は、17世紀あるいは18世紀から次第に形成された聖書解釈の近代的方法論であるが、19世紀になると近代歴史学の成立とも連関しながら、一つの学問としての基盤を確立することになる。これは、近代的知に適合した聖書解釈の方法論であり、キリスト教の近代世界への適合の所産として位置付けることができる。19世紀以降、キリスト教思想には、近代的知への適応という傾向が顕著に見られるようになる。

自由主義神学、宗教史学派

#### 8. 近代聖書学の方法論—歴史的批判的方法—

近代聖書学の方法論の前提については、トレルチの古典的な分析が存在しているが、パネンベルクは、これを「方法的な人間中心主義」として論じている。

「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」（パネンベルク、54頁）

### （3）近代聖書学の帰結

#### 9. 近代聖書学は、19世紀以降のキリスト教思想全般に大きな影響を及ぼすことになる。

当初は、「イエス伝」研究に見られるように、聖書学的な学的方法論によって、イエスについての歴史的事実を確定し、信仰に基礎を与えることも目ざされたが、しだいにその否定的な帰結が明らかになって行き、その問題点が意識されるようになった。

とくに、問題なのは、伝統的なキリスト教信仰と聖書学的成果との齟齬である。

#### 10. 聖書学的歴史学的方法論と結びついた自由主義神学において、神学の議論は形而上学的な問題設定を離れ、神の問題を倫理との関わりで論じる傾向が顕著になる（神学の倫理化）。しかもそれは、市民社会の倫理との適合を目ざすものであった。フォイエルバッハが、「神学の秘密は人間学である」と論じた事態である。

#### 11. 以上の19世紀の動向に対する批判は、伝統主義的で保守的キリスト教——古くは敬虔主義やメソヂスト運動、そして現代のキリスト教原理主義に至る反近代の系譜——からはもちろん、他にも様々な仕方で現れた。

- ・ヴァイス、シュヴァイツァーによる黙示的終末論の再発見

聖書学自体が、イエスの宗教思想と近代との相違を明確化し、市民社会の倫理の教師イエスという自由主義神学的な見方の限界を明らかにした。

- ・第一世界大戦後に、人間学化した神学を超えて、キリスト教神学固有の基礎を目指す弁証法神学の運動が開始された。ここに、神学は「現代」の状況に移行したと言える。

#### 12. 後の講義で論じるように、弁証法神学以降の現代神学の主流において、宗教と科学との関係論は、両者を区別・分離する方向へと展開することになる。

<参考文献>

1. 芦名定道編 『科学時代を生きる宗教——過去と現在、そして未来へ』北樹出版
2. ラプラス 『確率の哲学的試論』岩波文庫
3. 村上陽一郎 『近代科学と聖俗革命』新曜社
4. 阿部美哉 『政教分離』サイマル出版会
5. トレルチ 「神学における歴史的方法と教義的方法とについて」(『トレルチ著作集』  
2、ヨルダン社)  
『歴史主義とその諸問題 上中下』(『トレルチ著作集』5、6、7)  
『歴史主義とその克服』理想社
6. パネンベルク 「救済の出来事と歴史」(『組織神学の根本問題』所収、日本基督教  
団出版局)
7. イッガース 『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房
8. フォイエルバッハ 『キリスト教の本質 上下』岩波文庫
9. ティリッヒ 『キリスト教思想史II』(著作集別巻3)白水社
10. H・ツァールント 『20世紀のプロテスタント神学(上)(下)』新教出版社
11. 森田雄三郎 『キリスト教の近代性』創文社